

# 明代後期遼東における吏員人事 遼東都指揮使司 ?案を手がかりに

著者	宮崎 聖明
雑誌名	集刊東洋学
巻	118
ページ	61-80
発行年	2018-01-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00132783">http://hdl.handle.net/10097/00132783</a>

# 明代後期遼東における吏員人事

——遼東都指揮使司檔案を手がかりに——

宮 崎 聖 明

## はじめに

本論は、明代後期、主に嘉靖年間後期の遼東鎮における吏員の人事制度およびその運用実態について、檔案史料を手がかりに考察することを目的とする。

明代においては、今日我々が胥吏と総称するところの存在には法制上の資格を有している者とその下につく無資格の者とがいた。本論の検討対象は前者であり、明代の史料用語に従って「吏員」と称す。吏員は各衙門に設けられた「ポスト缺」に就く。例えば府州県衙門には吏・戸・礼・兵・刑・工などの房科があり、正副の房科長として司吏一名・典吏二名が置かれるのが原則であった。その他、布政使司・按察使司・都指揮使司（都司）といった省級の衙門や、倉・庫・衛所などにも各種の缺が置かれた。行論上必要な缺の名称は後述するが、これらを総称して「吏典」という。

こうした吏典缺の配置に加え、年齢制限・任期・等級・昇進条件など、吏員人事制度の概要は繆全吉氏の包括的研究により明らかとなっている<sup>①</sup>。ただ、主に会典・律例といった史料をもとにした繆氏の成果は全国一律の原則を説明するに止まっており、末端の地方衙門における施行細則・運用実態までは明らかとなっていない。

翻って、宮崎市定氏は清代の胥吏を例として、胥吏の地位が世襲や売買の対象となることが多かったと指摘している<sup>②</sup>。また最近、小野達哉氏は巴県檔案に見える権利金のやりとりなどの具体的事例に基づき清・同治朝の四川における胥吏相互の関係を照射した<sup>③</sup>。確かにそのような事例が明代にも存在していたことは筆者も否定するつもりはないが、その上で国家側がどのように吏員を管理しようとしていたかを考えるために制度の運用実態を考察することには意義があると思われるし、かかる考察は明・清それぞれの

胥吏のあり方を比較する上で意味のある作業といえよう。

また、昨今、判牘・檔案の整理・刊行が進み、従来は窺い知ることのできなかつた地方政治の具体像が明らかにされつつある。こうした史料を用いることで、規定が現場でどのように運用されていたか、あるいは全国法レベルで規定されていない現場裁量の運用がなされていたか否か、といった問題を考えることができるように思われる。そしてこうした考察は、「胥吏Ⅱ悪」であり人事制度など形骸化しているといった、士大夫の言説のくびきの如き胥吏理解から抜け出し彼らの実態に迫るためには必要な作業であるう。

かかる観点から、筆者はかつて、崇禎元年（一六二八）から広州府の推官を務めた顔俊彦の判牘『盟水齋存牘』を用いて、明末・広東における吏員人事について考察を行った（以下「前稿」<sup>4</sup>）。本論はその考察結果を踏まえて、檔案史料を手がかりに、嘉靖年間（一五二二～一五六六）を中心として、遼東における吏員人事制度の運用実態を分析し、広東との比較や広東の事例からは明らかにできなかった点について考察を行うことを目的とする。

## 第一章 使用史料・対象地域と本論の課題

### （１）使用史料・対象地域

行論に先立ち、使用史料と対象地域について確認しよう。本論では、中国・遼寧省檔案館が所蔵する明代檔案に含まれる、「遼東都指揮使司檔案」（以下、「都司檔案」）と称される檔案群を主要史料として用いる。本檔案群は、政治・軍事・司法・経済など、様々な分野に関する文書からなるが、その中に遼東鎮各衙門の吏員の人事に関するものが含まれている。これら吏員関連檔案の具体性は他に類を見ないものであり、明代地方衙門における吏員人事を考察するには好適の材料といえる。

都司檔案は、明の遼東都指揮司所有の文書が遼陽陷落の際に後金国の手に渡り、のちに瀋陽に運ばれ信牌袋の裏打ちや屏風の下張りに用いられて残ったもので、信牌檔・屏風檔と呼ばれる。遼寧省檔案館・遼寧社会科学院歴史研究所編『明代遼東檔案匯編』（瀋陽：遼瀋書社、一九八五。以下「標点本」）。引用の際には「遼」と表記し、漢数字で条文番号を記す）と、中国第一歴史檔案館・遼寧省檔案館編『中国明朝檔案総匯』（桂林：广西師範大学出版社、二〇〇一）の第八九冊～一〇一冊（以下「影印本」）。引用の際には「中」と表記し、算用数字で、冊番号・条文番号と

いう形式で記す）によって利用することができる。

しかし、利用に当たって留意すべき点がある。まず、裏打ちに用いられた際に四隅が切り取られているため字句の欠損がある。また、標点本・影印本ともに錯簡や紙片の脱落などがあるほか、一つの文書を複数の条文に分割したり複数の文書を一つに結合したりといった、整理・刊行作業における誤りに起因すると思われる事象がかなり多く見られる。また影印本は、一頁に収まりきれない紙片を分割して二頁に配置するといったことを行えばかりか、小さな紙片は拡大して載せてしまっている。つまり、原檔案の形状が不明確であるとともに、紙片毎に拡大縮小率が異なるため切り取りに遭った部分が何文字分に相当するかといった推測が困難なものが多い。書式が定型化している公文書の場合、欠けている部分の文字数さえ分かれば何が書かれているか類推が可能なが多いのだが、その作業の妨げとなるこの影印本の問題は極めて遺憾である。

以上のような問題から、影印本に全面的に依拠するわけにはいかない。本論では、影印本を底本とした上で、標点本や筆者の判断により字句の補正や条文の結合・分割を行うとともに、一部の条文は書式・内容を手がかりに大幅に順序を入れ替えた上で使用していることを断っておく。

さて、その上で吏員人事に関係する檔案を拾っていくと

全部で三七件を数える。内訳は呈文（報告書）が五件（表1）、名冊（名簿）が三二件で、後ほど説明する考課名冊が四件（表2）、考察名冊が二八件（表3）である。表の「備考」欄には、上述の整理・刊行作業の誤りと思われる点について筆者が施した考証を記しているが、考証の結果もとの檔案の姿を復元しがたいと判断した二件は検討対象から外してある。<sup>6</sup> その上で収録吏員を数えると、名前しか分からない者、名前は不明だが履歴に関する情報が得られる者も含めると二百六十名ほどとなる。

次に、対象地域である遼東鎮について確認しておこう。明代の地方行政は基本的に布政司・按察司が府州県を管轄

表1 都司檔案吏員関連呈文

番号	タイトル(標点本。以下同)	年月	備考
五五 (95-10)	分巡遼海東軍道會事陳王道為處置撥充當該吏典事的呈文	嘉靖26(1547)・6	
八九 (一) (90-11)	蓋州衛為查過京撥吏胡鳳陽爭參緣由事給巡按山東監察御史の呈文(第一份)	万曆10(1582)・5	
八九 (二) (90-11)	蓋州衛為查過京撥吏胡鳳陽爭參緣由事給巡按山東監察御史の呈文(第二份)	万曆10(1582)・5 前後	末尾署名部分欠落のため年月日未詳
九五 (90-24)	遼東都指揮使司為遼海衛京納吏鍾有志納銀上充倉吏候缺事給巡按山東監察御史の呈文	万曆29(1601)・2	
九六 (90-25)	義州衛指揮使司為司吏張所存役満事の呈文	万曆29(1601)・2	

表2 都司檔案吏員考課名冊

番号	タイトル	年月	備考
七〇 (89-51)	遼東都司各衛所候補典史送考文冊	嘉靖45(1566)・12	〔遼〕は嘉靖41とするが、七五とひと続きのため嘉靖45が正しい
七五 (89-49)	口口衛類送考試人員名冊	嘉靖45(1566)・12	七〇の続き
七六 (未収)	軍政掌印署都指揮會事類送典史考試名冊	嘉靖45(1566)・12	
七八 (89-50)	遼東都司定遼右衛及東寧倉等処尚考役満吏董懷宝等送考文冊	嘉靖45(1566)・12以降	嘉靖45・12に役満を迎えている者ありそれ以降
七九 (89-54)	遼東都指揮使司呈送考試典史年貌籍貫名冊	隆慶1(1567)・7	

表3 都司檔案吏員考察名冊

番号	タイトル	衙門	年月	備考	番号	タイトル	衙門	年月	備考
五八(89-19)	定造中南管屯指揮會事期通現役授換吏典年甲籍貫備細圖方冊	定造中南	嘉靖38(1559)・7		七七(89-45)	広草中屯衛典史参役満日名冊	遼東都司	嘉靖40(1561)・7	正し(は遼東都司)六四(二)と人名が重なる→同一衙門／遼が嘉靖45とするのは誤り
五七(89-20)	定造左衛軍政兼管屯指揮會事 造報現役吏典承差候缺丁史吏 應等姓名年甲早籍貫方冊	定造左衛	嘉靖38(1559)・7		未収(89-37)	□□南星送現役吏典考満候缺	遼東都司 日名冊	嘉靖40(1561)・7	六四(二)と人名が重なる→七七の続き
五九(89-22)	鉄嶺南星報現役吏典参充満日日期	鉄嶺衛	嘉靖39(1560)・8		六四(一)(89-27)	軍政會書兼管屯署都指揮會事 申有前星報吏典参役満日日期	遼東都司	嘉靖40(1561)・7	六四(二)と人名が重なる→89-37の続き
六〇(一)(89-23)	□□南星報現役空缺吏典年甲 籍貫参充満日日期名冊	広草前屯衛	嘉靖39(1560)・9	「杏林會」の名あり→広草前屯衛	六四(二)(89-32)	軍政會書兼管屯署都指揮會事 申有前星報吏典参役満日日期	遼東都司	嘉靖40(1561)・10	
六〇(二)(89-24)	□□南星報現役空缺吏典年甲 籍貫参充満日日期名冊	広草前屯衛	嘉靖40(1561)・閏5	同上	六五(89-28)	定造中南星報吏参充満日 満日名冊	遼東都司	嘉靖40(1561)・7	
六〇(三)(未収)	□□南星報現役空缺吏典年甲 籍貫参充満日日期名冊	広草前屯衛	嘉靖40(1561)・閏5	人名→六〇(二)と同衙門	六六(一)(89-29)	□□南星報司吏撰換候缺丁史 役満等項清冊	遼東都司	嘉靖40(1561)・7	
六一(一)(89-41)	自在州遼報現役吏典参充満日日期 自在州及丁史方冊	自在州	嘉靖39(1560)・12		六六(二)(89-35)	□□南星報司吏撰換候缺丁史 役満等項清冊	遼東都司	嘉靖40(1561)・10	六六(一)と人名が重なる→同一衙門
六一(二)(89-33)	自在州遼報現役吏典参充満日日期 自在州及丁史方冊	自在州	嘉靖40(1561)・10		六七(89-30)	東寧衛星報現役吏典参充役満 日名冊	東寧衛	嘉靖40(1561)・8	
七二(89-42)	蓋州南星報吏役満役名冊	蓋州衛	嘉靖40(1561)・閏5	「遼」は嘉靖42とするが誤り	六八(89-31)	□□南星報現役吏典考満候缺	鉄嶺衛	嘉靖40(1561)・9	「結路倉」の名あり→鉄嶺衛
六三(89-26)	遼海南星報現役候缺吏典参充 満日日期名冊	蓋州衛	嘉靖40(1561)・6	七二と人名が重なる→正しくは蓋州衛	六九(89-34)	□□南遼報吏典参充満日日期 日名冊	□□南	嘉靖40(1561)・10	
六二(89-25)	遼寧南星報現役守候已満吏典 参充日日期名冊	遼寧衛	嘉靖40(1561)・7		七三(89-46)	広寧衛遼報候缺吏典役満名冊	広寧衛	嘉靖45(1566)・2	「中」は別衙門
未収(89-52)	遼寧南星送現役吏典参役満 名冊	遼寧衛	嘉靖40(1561)・7	「中」は嘉靖47とするが誤り	未収(89-46)	広寧衛遼報候缺吏典役満名冊	□□南	嘉靖44(1565)・6以降	嘉靖44(一)に参充着役している者あり→それ以降
未収(89-52)	遼寧南星送現役吏典参役満 行太僕寺日日期名冊	遼寧衛	嘉靖45(1566)・7		七四(89-48)	遼東行太僕寺通報令典参充 行太僕寺満日日期名冊	遼東都司	嘉靖45(1566)・7	
五六(一)(89-44)	広草中屯衛司吏撰換典参役満 日日期名冊	広草中屯衛	嘉靖40(1561)・6以降	衙門名は未詳。印影によるか	未収(89-58)	□□道星送本年春季現役候缺 吏典役満日日期名冊	□□道	隆慶2(1568)以降?	隆慶2(1568)以降? 定の一(中)の繁字は誤り
五六(二)(89-36)	広草中屯衛司吏撰換典参役満 日日期名冊	広草中屯衛	嘉靖40(1561)・12	同上	未収(89-59)	各衛星送現役候缺吏典参充役 満日日期名冊	不明	隆慶6(1572)?	複数衙門の名冊の残断

して民政・監察を、都司が衛所を管轄して軍政を担当することとなっていた。しかし遼東鎮は辺境に位置する軍管区であったため民政系統の行政区画は設置されず、都司・衛所が一般行政をも担当することとなっていた。さらに、省一帯の監察を行い、のちに実質的に省長官としての役割を担うようになり、その一環として「吏農之參撥」、すなわち地方吏員人事の最終決裁を行った巡按御史は、山東から出向する形で巡按「山東」監察御史という肩書きを帯びつつ遼東に出巡していた。さらに明中後期には山東布政司・按察司から官僚が派遣され分司が設けられるようになった。つまり、遼東鎮における行政は、巡按御史(察院)を頂点に、都司―分司―衛―千戸所という系統によって担われ、吏員人事もこの系統で処理されていた。

これらの衙門には他省と同様に行政文書・会計帳簿の処理・管理といった事務処理に当てるべく吏員が配置され、各吏典缺に就いて業務を行っていた。遼東鎮における基本的配置を挙げると、都司・衛の各部局、および馬政をつかさどる行太僕寺には令史・典史が置かれたが、都司・衛のいくつかの部局は典史のみであった。また千戸所には司吏、軍糧を管理する倉と金銭を管理する庫には攢典が設けられていた。これら吏典の序列は、令史と典史が併設されている衙門においては、両者は正副の関係であった。また、

衛門の品級も缺の序列に関係しており、例えば千戸所の司・吏から衛の典史に移るのは昇進を意味した。<sup>9)</sup>

## （2） 先行研究の成果と本論の課題

次に、先行研究によって明らかとなっている点、および前稿において考察した点を挙げ、本論の検討課題を示すこととする。

### （a） 吏員人事制度の概要

明代の吏員人事は、三年を一期（一考）として、選抜↓配属↓任期満了に伴う考課↓再度配属、というサイクルを繰り返し、三考まで務める原則であった。選抜は、国初は「農民」（郷民）から候補者を選抜する僉充中心であったが、軍事費の問題が顕在化した明中期以降は求充、すなわち捐納が中心となる。選抜された者は巡按御史によって配属先衛門が決定される。この配属手続きを「定撥」「考撥」という。定撥された吏員は配属先衛門に赴き、吏典缺に就く。吏典缺に就く／就けることを「参充」といい、特に衛門側から缺に就けることを表現する時には「収参」ともいう。衛門に所属している間に定期的に巡按御史の考察（評定）を受けることとなっているが、前述の考察名冊はこの際に作成・提出されるものである。すなわち、考察名冊とは各衛門に所属する全吏員のリストということになる。

最初の三年の任期（一考・初考）が終わると考課を受け、再度定撥される。この考課は三ヶ月ごとに行われるが、その際に省（遼東の場合は鎮）全体の対象吏員が布政司（遼東の場合は都司）経由で察院に送られる。この考課対象者のリストが考課名冊である。なお、捐納して初考の定撥を待つ者（「新納銀農民」という）もこの名冊に含まれる。

次の任期（二考・転考）が終わると、巡按御史が行った考課の結果は吏部へ送られる。その際吏員には履歴や勤務評価を記した文書が発給され（給由）、この手続きを経て吏員は上京する。そして吏部のチェックを経たのちに試験を受け、三考目は北京で就役する原則となっていた。三考目を「京考」と称するのはこのことに因む。

ただし、万暦『大明会典』巻八・吏部七「吏役参撥」には、

凡聴撥、挨缺未到、願撥南京各衛門及在外各王府・各衛所・各倉庫当該者、俱准、每兩月一放。其五年一次疏通。凡告撥原籍司府州県等衛門者、俱准。如所告缺、或裁革、或守候人多、仍許起送赴部。

とあり、北京で缺が空くのを待っているが順番が回ってこず、南京各衛門や衛所、倉・庫、さらには原籍司府州県等衛門での就役を願う者はそれを許可することとなっていた。これは万暦会典記載の規定ではあるが、のちに見るよ



うに倉・庫で就役する京考吏は嘉靖年間の檔案中にも見出せるので、この規定は万暦年間よりも前から用いられていたとして間違いない。なお、北京での就役は初考の成績優秀な者にも認められることがあった。京考を終えると諸手続を経て官位を得ることができた。

(b) 明末広東における運用実態と本論の課題

次に、上述の制度が明末広東の地方衙門においてどのように運用され、またどのような問題を惹起していたかを、先行研究<sup>1)</sup>および前稿の考察結果をもとに見てみよう。

捐納により吏員資格所有者が増加したため、ほとんどの吏員は配属先衙門に定撥されたのちに吏典缺が空くのを待つ必要があった。この缺待ちの状態を「候缺」「候参」などと称す。そのため広東では、衙門に定撥された吏員は「参吏簿」と呼ばれる待機リストに名を掛けられ、空き缺が生じるとその順に従い参充された。

参吏簿に記載される順番の決め方は特徴的で、「行柱」と呼ばれる、吏員の属性にもとづくカテゴリーに左右された。行柱には、「農民」(初考の吏員)「転考」(二考の吏員)「截参」(過失などで任期を打ち切れ改めて候缺している者)「起復」(父母が死亡しいったん役務を離れ、服喪期間を終え候缺している者)などがあり、参吏簿にはこの行柱ごとに候缺吏の名前が記載される。そして、例えば転考・農民

の候缺吏員が並存していれば、転考の者から先に参充していき、そして転考がいなくなつてから農民の者を参充していくという方法が採られた。ただし、参充される缺の等級はあらかじめ決められていて、例えば典吏缺相当の候缺吏が、同じ衙門の司吏缺が空いたからといってそれに参充されるというようなことはなかった。

このような方法は、嘉靖年間にも行われていた。戴璟修・嘉靖十四年(一五三五)刻『広東通志初稿』卷一〇・公署〈吏員附〉「定先後挨参」には、「行頭」(盟水齋存牘)の「行柱に同じ」ごとに候缺吏員が参吏簿に記載されていたこと、これが挨次収参(順序に従い参充すること)の順序決めに用いられていたことが記されている。<sup>2)</sup>すなわち、定撥の段階では缺は指定されず、空き缺が生じると参吏簿の中で上位の行柱に属する者から順に参充し、同一行柱の者が複数候缺していれば定撥の年月日順に参充する、というのが明末広東におけるやり方であった。これを「行柱方式」と呼んでおこう。

この方式は、「争参」と呼ばれる、吏典缺をめぐる訴訟沙汰を引き起こした。候缺吏は参吏簿の順番を追い抜いて一刻も早く参充されようと、また少しでも利権の大きい缺を得ようと、さまざまな不正を働いた。

以上が前稿までで明らかにしている明末広東の実態で

あるが、これを受けて本論では次の二点を検討課題とする。第一に、参充缺の決定方法と候缺吏員の処遇の問題である。行柱方式が採られていた明末広東においては配属先衙門で空き缺が生じるまで自分がどの缺に充てられるか不明であったということになる。このことが争参事案を惹起したことは前述の通りである。また広東では、前述のように定撥年月日の先後よりも初考か二考かといった行柱の違いが参充順に影響を与えていた。こうした方法が遼東においても採られていたのか。これが第一の検討課題である。

第二に、京考吏員の扱いについてである。『盟水齋存牘』においては京考吏員の存在は見出せなかったが、都司檔案には「京撥」と称される、中央の吏部から定撥されてきた京考吏が見える。彼らの人事はどのように行われていたのか。これが第二の検討課題である。

## 第二章 遼東における定撥・参充方式と候缺

まずは第一の検討課題から見ていこう。都司檔案<sup>13</sup>五七(89.20)「定遼左衛軍政兼管屯指揮僉事造報現役吏典承差候缺丁憂吏農等姓名年甲籍貫方冊」(嘉靖三十八年七月)は、定遼左衛が作成した考察名冊である。考察名冊の記載情報の多寡は様々で、なかには姓名・年齢・行柱、定撥や参充の年月日程度の情報しかないものもあるが、この定遼左衛

の名冊はかなり詳細な人事情報を記している。その中から、記事の欠損が比較的少ない魏迪なる吏典を挙げ、遼東における人事手続きを見てみよう。

鎮撫司吏一名。魏迪。年二十三歳。山東濟南府德州平原人。嘉靖三十三年三月内、(給引)前來遼東探親、遇蒙推広事例、以便開納、以濟迎儲事、状(赴巡)按王老爺処、告批都司、查無違礙、筭付定遼前庫照例納「銀」……、出給通関、繳報訖、咨送分守道、案行都經歷司、造冊類送、本道轉呈巡按王老爺処、考撥東寧倉攢典、頂補朱尚仁名缺、三十四年六月二十四日参充着役。扣至三十五年五月二十三日一考役満、起送都司、類送巡按周老爺処、考撥定遼左衛鎮撫司吏、頂補役満史蔣涵名缺、三十六年七月初七日参充着役。扣至三十九年六月初六日両考役満。

魏迪は定遼左衛鎮撫の見役司吏で、名冊作成当時は二三歳。山東濟南府德州平原の人であるが、嘉靖三十三年三月に「探親」のために遼東に來た、とある。探親には「親戚を訪問する」という意味があり、他省を本籍とする者の遼東移住の理由には必ずこの表現が用いられる。訪問すれば帰るのが普通なのにそのまま吏員になっているわけであるから、基本的には移住・移動のことを記す際の書類上の常套句にすぎないとしてよからう。付言すると、「前往北京探親」



という表現もあり、こちらはいずれも北京で捐納して吏員資格を獲得し遼東で就役するケースに見られる。

魏迪は遼東移住後、捐納して吏員となり、東寧倉の攢典に定撥され、嘉靖三十四年六月二十四日に参充着役した。ちょうど十二ヶ月が経過した同三十五年五月二十三日に初考役満を迎えた。嘉靖三十四年には閏十一月があり、史典の任期は閏月を含めて十二ヶ月を一年と計算する。それよりも重要なのは、三年ではなく一年で役満となっている点である。万曆『大明会典』卷二・吏部一・考覈二「吏員〈承差知印附〉」には、

凡吏員一考満。洪武二十六年定、在京大小衙門、及在外布政司、并直隸府州県吏典、各以三年考満給由。其倉攢典、以周歲為満。

とあり、洪武年間から他の史典缺と異なり倉の攢典は一年で役満という扱いであった。このことはのちの行論で意味を持つてくるので留意されたい。

そのち察院による考課を経て、今度は定遼左衛鎮撫の司吏に定撥され、嘉靖三十六年七月七日に参充着役して現在に至り、同三十九年六月六日に二考が満了することになっている、とある。「扣至某年某月某日某考役満」という表記は、すでに役満を迎えた場合にも役満予定年月日を示す場合にも用いられる。

さて、魏迪に関する記載からは、定撥の段階ですでに参充される缺まで指定されていることがわかる。他の名冊にも、「蒙巡按某老爺考撥某司史名缺」や、「考撥某衛某房典史」などの文言が見え、やはり定撥の段階ですでに配属衙門だけでなく参充缺まで決定されているようである。定撥後に配属先衙門で参充缺を決定する広東とは異なるということが見て取れよう。

次に、広東で見られた行柱による候缺順位の決定が遼東においても行われていたかを検討してみよう。同じく五七(8920)には、倉攢典の缺を待つ三名の吏員の名前が見える。引用は省略するが、「候缺史典六名。軍儲倉攢典三名」との見出しに続き候缺攢典三名について、先ほどの魏迪と同じような情報が記載されている。この見出しの書き方や、各々の記載に「考撥（あるいは改撥）定遼左倉攢典、守候某某名缺」とあることから、前述のように候缺段階で参充缺が決まっていることは明白なわけであるが、ここで検討したいのは候缺吏の記載順である。三名の候缺吏は、まず初考の蕭有養が、続いて初考の李応挙が就役することとなっているが、そのあとには二考の孫世勲の名前が掛けられている。これは定撥決定の年月日の順になっているようである。もし広東であれば転考行柱として先に参充されるはずの孫は、遼東においては初考の二人よりも後となって

いる。すなわち、候缺吏に初考・二考の者が並存している場合、行柱の違いは参充順の決定因子にはならない、ということになる。

では二考吏と京考吏とがともに候缺している場合はどうであろうか。七四（8848）「遼東行太僕寺造報令典参充扣満日期名冊」（嘉靖四十五年七月）には行太僕寺の見役令史一名・候缺令史二名の名前が見える。それによると、

見役令典三名。

令史一名。

曹可立。係瀋陽中衛人。以農民於嘉靖四十三年四月十一日参「充」……。扣至四十六年三月初十月初考役満。

《中略。見役典吏二名の姓名・関連事項の記載あり》

（候缺令典三名。）

令史二名。

劉国奇。係蓋州衛人。以転考於嘉靖四十「三」……（守候）曹可立名缺。

邵添祚。係定遼前衛人。以京考於嘉靖四十五年二月「十」……（守候）劉国奇名缺。

《後略。候缺典吏一名の姓名・関連事項の記載あり》

とある。二名の候缺吏は転考（二考）、京考の順に記載されており、ここでも定撥年月日の先後により参充順が決定されている。

以上から、嘉靖年間の遼東においては、明末広東と異なり、定撥と同時に参充缺も決定され、また二考吏・京考吏を優先することも原則としてなかったということが分かる。これを「参充缺指定定撥方式」と呼んでおこう。

この相違が地域の違いによるものか時期の違いによるものかを断定するには、同様の事例を全国的に集めて比較することが必要であるが、史料の残存状況から見てそれは不可能であろう。よってここでは以下のような見通しのみを示しておく。

まず広東については、嘉靖前期に参充缺指定定撥方式から行柱方式への全面的変更があったと思われる。その根拠となるのは先ほども挙げた嘉靖『広東通志初稿』の記述である。当該書の吏員に関する項目の多くは、編者である戴璟が広東巡按御史を務めていた際に自ら裁可・実施した施策を記載する形となっている。そのうち、先ほども触れた「定先後挨参」には、

查得、布政司与都按二司参吏旧規、転考・農民・起復・截参・陞参・承差并生員充吏、各行頭挨次収参。行之既久。事体允便。

と、行柱に基づく参充が都布按三司で「旧規」として行われていたとある。このあとに参吏簿の作成方法などが記され、さらに、

以後本司定撥吏農、不論房眼、止照衙門定撥給批、前去府衛州縣提掇司斷事司、投批挨參。

と、「房眼」（＝部局。「眼」は房屋の量詞）に関係なく衙門に配属するという方式を、府以下の各衙門においても実施するという提案がなされ、これがそのほかの提案とともに、

巡按御史戴璟批、農民准投批先後挨參。転考吏照例先儘。丁憂起復亦以投批次序挨參。

と、戴璟の裁可を受けている。厳密に言えば、批文では候缺吏は配属先衙門に「批」（定撥命令書）を提出した月日の順を以て候缺順を決めるべし、転考は先に全員参充せよとあるのみである。しかし、転考を先に参充するというのは行柱に基づく参充順決定にはかならない。三司のやり方を「旧規」として挙げ、参吏簿の作成方法を詳述していることも併せ考えると、缺を指定せず定撥し候缺させるという行柱方式のもう一つのやり方も同時に裁可されたと考えるのが自然であろう。要するに、行柱方式は以前から三司で行われていたものを広東全域に、遅くとも嘉靖十四年（一五三五）嘉靖『広東通志初稿』刊行年）までに敷衍した、とすることができよう。

では、それ以前はどのような方式だったのか。それは参充缺指定定撥方式以外に考えられない。「以後本司定撥吏

農、不論房眼」とあるのだから、「以前」は「房眼を論じ」て定撥が行われていたはずである。すなわち、遼東のような参充缺指定定撥方式を当初は広東でも採っていたが、やがて便宜的に行柱方式を用いるようになった、と考えることができよう。そして、広東においても参充缺指定定撥方式が先行して実施されていたことは、これが本来のやり方であったことを推測させる。方式を変えた広東に対し遼東は嘉靖後期に至ってもそれを遵守していたということになる。

そうすると、広東のように便宜に従って吏員人事の施行細則を決定することが他の地域でもあり得たのかという問いが浮かぶ。これも史料の問題から明確な回答は困難であるが、参考材料として北直隸順天府の事例を挙げておこう。

王之都『王爾章著書』（東洋文庫蔵）所収『密雲縣彈心録』不分卷「一件清查吏弊挨次撥參置簿遵守由稿」は、王之都が密雲県の知県を務めていた万曆二十七年（一五九九）に、吏員の候缺をめぐる問題の解決策を順天府に上申した由稿である。そこでは、県内の十四の史典缺に対し候缺吏が七十人もおり人事が滞留していること、京撥吏の呉鵬なる者が石匣倉場の攢典缺を候缺していたものの、「撫院の効勞」を理由に多くの候缺吏を出し抜いて不正に参充されようと図ったこと、このような不正を防止する策を講ずべきであ

ることが述べられる。前稿において指摘した広東の争参事案と似たような事態が生じていたことが分かるとともに、缺を指定されて候缺しているという点は遼東と同じである。これに続き、

合無申乞嗣今以後、京撥・転考・農民等吏、照依本府原領吏役条約十註規例挨参。其各缺役満日期与各吏帖撥挨順年月日、置立吏農総簿二扇、乞行批示印鈴、一存本府備照、一発本県遵行。如遇各吏定参之日、上下比対、年分先後相同、方准照格收参外、有丁憂事故等項、另文申明、先儘下首頂補。

とある。「吏役条約十註規例」はこの引用より前の部分から、知順天府が以前に出した規約であることが分かる。これに依拠し、候缺・役満の日期や帖撥（定撥のことであろう）の年月日を記載した「吏農総簿」二冊を作成し、一冊は府が保管し、一冊は県が使用する、とある。これも広東の参吏簿を彷彿させる。ところがこれに続いて、「各吏の参充の時が来れば、「名簿記載順の」上下を比較対照し、もし年分の前後（Ⅱ定撥の順）が同じであればそこではじめて資格によつて収参するのに加え、丁憂・事故などがあつた場合には別文で申明し、「彼らを後回しにして」先に候缺順位が下の者を全て頂補する」とある。すなわち、順天府においては知府の出した規約に依拠して、吏員は参充缺

を指定した上で定撥され、参吏簿に類似する名簿が作成されたものの、行柱の違いは定撥年月日が同じ場合にはじめて考慮される、という運用が行われていたのである。

以上のように、吏典の参充は、巡按御史が定撥を行うところまでは全国一律に制度化されていたものの、参充の段階においては各地域・衙門の自己裁量に委ねられる部分があつたと考えることができよう。以上が目下のところの筆者の見通しである。

では次に、第二の検討課題である京撥吏の人事について、章を改めて見ていこう。

### 第三章 京撥吏の人事と処遇

前述の通り、二考役満の吏員の考課結果は各省から吏部へ送られ、試験を受けたのちに京師衙門に定撥されるといふのが制度の原則であつたが、一方で前掲の万曆『大明会典』の記事にあつたように、希望者には地方での就役が認められていた。そのうち、本論が対象とする遼東には、「願撥・南京各衙門及在外各王府・各衛所・各倉庫・当該者、俱准」という規定が関係してくる。『盟水齋存牘』では存在を見出せなかつた彼ら京撥吏について、都司檔案をもとにその人事を見ていくこととするが、結論から先に言えば、遼東

には「京撥缺」とでも呼ぶべき特別な吏典缺があらかじめ設定されていたと考えられる。

六四(一)(8932)「軍政僉書兼管屯署都指揮僉事中有爵呈報吏典参充役満日期名冊」(嘉靖四十年十月)は遼東都司が作成した考察名冊であり、都司の各房科司に所属する見役・候缺・丁憂吏員が、欠損により姓名が不明な者も含めると計四十五名記載されていたはずである。また、七七(8945)「広寧中屯衛典史参充役満日期縁由名冊」(嘉靖四十五年)、「遼」未収(8937)「□□衛呈送現役吏典考満候缺日期名冊」(嘉靖四十年)、六四(一)(8927)「軍政僉書兼管屯署都指揮僉事中有爵呈報吏典参充役満日期名冊」(嘉靖四十年七月)の三つに見える吏員の姓名・缺のほとんどは六四(一)と重複する。よって、この三つの条文は本来一つの文書で、六四(二)の三ヶ月前に作成された考察名冊であるとして間違いない。この三つの条文を合わせると少なくとも計四十二名の吏員の存在が確認できる。【表4-①】はこの三つの条文の見役・候缺・丁憂吏員の内訳をまとめたもので、【表4-②】は六四(一)に基づくと同様の表である。なお、檔案の欠損により姓名・履歴などが不明な者のうち、もう一方の檔案から情報を補える場合は補っている<sup>(1)</sup>。

際立っているのは吏房の構成である。①②ともに、見役

表4-② 都司所属吏員(嘉靖40年10月)

	見役	候缺	丁憂
吏房	令:高儒(京) 典:季夢龍(京) 典:常尚義(京)	令:鄧尚文(二) 典:王大卿(京) 典:馬驊(京) 典:張文学(京) 典:馬宗堯(京)	
糧房	令:□□□(初) 典:邵添祚(二)	典:王嘉猷(初)	
戸房	令:謝恩(二) 典:□□□(初) 典:王景桂(初)	典:劉喚章(二) 典:馬如鳳(初)	
礼房	令:欠員 典:王自益(初) 典:張世武(二)	典:□□□(初) 典:姚紆(初)	典:鍾明遠(初)
恩軍科	令:田騰爵(初) 典:□□□(初)	典:于尚仁(二)	
兵房	令:欠員 典:劉得文(初) 典:霍德彰(初)	令:司大奎(二) 典:樊卿(初)	
刑房	令:欠員 典:張思聰(初) 典:□□□(二)	典:王守正(二)	
工房	令:王文仲(二) 典:張文魁(二) 典:金承武(初)	典:葛輔(初)	
承発科	典:倪正位(二)	典:施極(初)	
□□科	令:劉国奇(初) 典:石景柏(初)	典:俞堯臣(初)	
架閣庫	典:苗得雨(初)	典:劉棣(京)	
□□司	典:□□□(京)	典:王濟(京)	

表4-① 都司所属吏員(嘉靖40年7月)

	見役	候缺	丁憂
吏房	令:高儒(京) 典:季夢龍(京) 典:常尚義(京)	令:鄧尚文(初) 典:王大卿(京) 典:馬驊(京) 典:張文学(京) 典:馬宗堯(京)	
糧房	令:□□□(初) 典:邵添祚(二)	典:王嘉猷(初)	
戸房	令:李清(京) 典:□□□(初) 典:王景桂(初)	令:謝恩(初) 典:劉喚章(二)	
礼房	令:□□□(?) 典:王自益(初) 典:張世武(二)	典:鍾明遠(初)	
恩軍科	令:田騰爵(初) 典:□□□(初)	典:于尚仁(二)	
兵房	令:董廷臣(京) 典:劉得文(初) 典:張国棟(京)	典:□□□(二) 典:樊卿(初)	
刑房	令:張思聰(初) 典:□□□(二)	典:王守正(二)	
工房	令:王守春(京) 典:□承恩(初) 典:張文魁(二)	典:金承武(初) 典:葛輔(初)	
承発科	典:倪正位(初)	典:施極(初)	
□□科	令:劉国奇(初) 典:石景柏(初)	典:俞堯臣(初)	
架閣庫	典:苗得雨(初)		
□□司	不明		

(初)は初考、(二)は二考、(京)は京考。4-②も同じ

の令史・典史は全て京撥吏で占められているとともに、候缺も一人を除いて全て京撥である。例外である候缺令史の鄒尚文は、①では「一」考、②では「転考」となっているが、どちらかが書き誤っているのであらう。いずれにしても京撥ではない。さらに、他の部局の候缺典史が一名ないし二名であるのに比べて、吏房だけが四名もの候缺典史を抱えている。中央吏部が現場の吏員配置やすでに候缺している吏員の人数を度外視して定撥を行つた結果であらう。都司吏房令典缺は京撥吏を参充するための缺と考えられる。

また六房に限って見ていくと、①では、吏房以外の令史にも京撥があり、戸房・兵房・刑房・工房の見役令史が京撥であることが確認できる。礼房については、檔案に欠損があり、令史が在任していることは分かるが京撥か否かは不明である。つまり、七月時点では六房の見役令史のほとんどが京撥吏であつたことになる。一方、三ヶ月後の②では、六房で引き続き見役である京撥吏は吏房のみで、その他はみな離任しており、後任が充当されているのは戸房・工房だけである。戸房は①の七月段階で候缺令史がいたが、工房は十月にいたつてようやく定撥参充されている。なお、兵房には丁憂令史として①には見えない司大奎の名があり、「於嘉靖四十年□月初八日参充着役。至本年九月二十

七日丁母憂」とある。前任令史の役満後、何月のことかは分からないが定撥参充され、そののち九月に丁憂したようである。

都司の六房の事務長という重要な缺であるにもかかわらず候缺吏が少ないのは、令史缺獲得に要する銀両が多額であるためであらう。都司檔案を通覧すると、捐納の際の納入額と初考参充缺の双方が記載されている例が若干数存在する。そのうち最も高額なものは四十両で、初考で都司六房典史・同架閣庫典史に参充されている。四十両という納入額はほかに参充缺未定のものも含め三例しか存在しない<sup>(18)</sup>。都司令史缺を得るにはより高額の銀両が必要なはずである。吏員側としてもおいそれと払える金額ではないだろうし、従つて官側としても遼東内で条件を満たす吏員を確保することは困難だつたと思われる。六房令史も京撥缺としてよからう。

なお、②「□□司」も見役・候缺典史ともに京撥である。あるいは経歴司かと思われるが、檔案そのものの衙門名が欠落しているため断定はできない。

では、名冊全体に対象を広げるとどのような傾向が見られるだろうか。【表5】は名冊から京撥吏を抽出したものである。先ほどの都司六房の令史(14)(21)(24)・都司吏房の典史(15)(20)に加え、行太僕寺の令史(31)、千戸所



表5 都司檔案中の京撥吏

番号	衙門	名前	缺(見役・候缺・丁憂)	備考
五八(89-19)	定遠中衛	①李珣	倉撰典(見役)	
		②李珣	倉撰典(候缺)	
五七(89-20)	定遠左衛	③李邦美	税課司司吏(見役)	
		④曹懷保	税課司司吏(候缺)	
		⑤傅延齡	税課司司吏(候缺)	
		⑥楊光宗	税課司司吏(候缺)	
		⑦朱官	税課司司吏(丁憂)	
六〇(一)(89-23)	□□衛	⑧張清	倉撰典(候缺)	続六〇(二)(三)では見役
六二(89-25)	寧遠衛	⑨李学	倉撰典(見役)	二考だが京撥
未収(89-52)	寧遠衛	⑩王文深	倉撰典(見役)	二考だが京撥
七二(89-42)	蓋州衛	⑪楊廷弼	千戸所司吏(見役)	
		⑫孟銀	倉撰典(候缺)	六三では見役
		⑬胡応爵	庫撰典(候缺)	ただし、六三では遼東で定検と記載
七七(89-45)	遼東都司	⑭高儒	都司吏房令史(見役)	⑯馬驊は七九(89-54)に役満として記載
未収(89-37)		⑮李夢龍	都司吏房典史(見役)	
六四(一)(89-27)		⑯常尚義	都司吏房典史(見役)	
六四(二)(89-32)		⑰王大卿	都司吏房典史(候缺)	
		⑱馬驊	都司吏房典史(候缺)	
		⑲攝文学	都司吏房典史(候缺)	
		⑳馬宗堯	都司吏房典史(候缺)	
		㉑李清	都司戸房令史(見役)	
		㉒董廷臣	都司兵房令史(見役)	
		㉓張國棟	都司刑房令史(見役)	
		㉔王守春	都司工房令史(見役)	
		㉕劉棟	都司架閣庫典史(候缺)	
		㉖□□□	都司□□□典史(見役)	
		㉗王濟	都司□□□典史(候缺)	
六六(一)(89-29)	□□衛	⑳趙潤	倉撰典(候缺)	六六(二)では見役
五六(一)(89-44)	広寧中屯衛	㉙唐守愚	千戸所司吏(見役)	
五六(二)(89-36)		㉚□□□	千戸所司吏(見役)	
七四(89-48)	遼東行太僕寺	①邵添幹	行太僕寺令史(候缺)	六四(二)では二考・見役都司糧房典史
七〇(89-51)	遼東都司	②劉□□	都司架閣庫典史(丁憂)	六四(二)の㉕劉棟か
八九(90-11)	蓋州衛	③胡鳳陽	庫撰典(候缺)	
	広寧左衛	④劉棟	倉撰典(候缺)	
五五(95-10)	広寧左衛	⑤張棟	倉撰典(候缺)	

の司吏(⑪⑲⑳)なども見られるが、一つの缺に集中しているという点では税課司司吏(③④⑦)が注目される。逆に広範に分布しているという点では、撰典(倉撰典①②⑧⑨⑩⑫⑳③④⑤・庫撰典⑬⑳)も特徴的である。

以上から、都司檔案を見る限りでは、吏部が三考吏員を地方に定撥する際にもやはり参充缺まで指定しており、そして京撥吏がA都司吏房の令史・典史、B都司六房の令史、

C税課司司吏、D倉・庫撰典に集中していることから、「京撥缺」と呼ぶべき缺が設定されていたと考えられよう。同じ令史・司吏・典史という肩書きでも、衙門の品級によって待遇やその後の昇進、果ては京終了後に獲得できる官位に差が生じる<sup>(19)</sup>。都司の筆頭部局にあたるA吏房の令典、ならびにB都司六房の令史は、おそらくエリートコースの一環とされたのであろう。C税課司の司吏が官位獲得にどのように影響したかは判然としないが、候缺の人数の多さからやはり京撥缺の一つと見なしでも問題はないだろう。

一方、D倉・庫撰典は史典缺の中でも最下層に属する。これらが京撥缺になっているのは先に見た万暦『大明会典』の規定に基づく。当該規定に該当する記事を『明実録』に見出すことはできなかったが、この檔案における分布からも嘉靖後期には施行されていたと考えてよいだろう。撰典が京撥缺とされた背景には、そもそも捐納額の少ない吏員は撰典にしかなれず、令史・典史クラスに比べて撰典がより多く存在したという事情があるろう。前引『密雲県志』の記事にも、県の衙門十四箇処に対し候缺吏が七十人いる(一衙門に缺一つとしても比率は一・五)<sup>(20)</sup>が、撰典缺一つに十人もの候缺吏が集中していたとある。では京撥撰典の人事はどのように進められていたのだろうか。次の呈文をもとに見てみよう。

八九（90-11）「蓋州衛為查過京撥吏胡鳳陽爭參緣由事給巡按山東監察御史的呈文（二份）」（万曆十年五月）は、嘉靖年間からやや時代は下るが、蓋州衛庫の攢典缺の候缺順をめぐって起こった争参事案について蓋州衛が巡按御史に送った呈文である。二部の文書からなるが、紙幅の都合上、第一份のみを扱う。万曆十年（一五八二）五月一日、蓋州衛庫の攢典・許三畏が役満を迎えることとなったが、後任をめぐり初考吏・徐行と京撥吏・胡鳳陽とが争った。先に定撥され候缺していたのは徐行だったが、蓋州衛は、「いま胡鳳陽が定撥されてやつて来たのは、京考は前途がふさがっているので外考を申告したためである。さらにまた本庫で徐行が守候しているのに遭ったのでは、京考の者が果てしなく守候することになってしまう」<sup>(21)</sup>との理由を挙げて、胡鳳陽を先に参充すべきとの判断を下している。さらに、蓋州衛庫では初考吏・京撥吏がともに候缺していたという前例がないため、前年に類似の事案が発生した広寧左衛から一件書類を取り寄せ前述の判断の根拠としている。それによると、広寧左衛でもやはり先に京撥吏を参充し、そのちに初考吏を参充するとの決定が下されたという。<sup>(22)</sup>この前例からも京撥吏の胡鳳陽を先に参充すべきである、というのが蓋州衛の判断であった。

このように万曆年間には京考吏が遼東の攢典缺へ定撥さ

れてきた場合はこれを優先して参充するという措置が採られていた。嘉靖年間にも同様であったかは判然としないが、もしそうだとすれば第二章で見た参充缺指定定撥方式の例外措置が攢典については採られていたことになるし、そうでないとしても万曆年間にはこの例外措置が京撥吏に認められるようになったということになる。

いずれにせよこの措置は京撥吏に対する優遇措置としての意味合いを持つ。先ほど「京考は前途がふさがっている」という蓋州衛の文言を挙げたが、同様の表現は名冊にも、京考吏が遼東への定撥を願った経緯として、「因在京缺少人多、挨参不前、具状告撥某缺」などといった文言で現れる。多分に定型句としての意味合いを含んでいるとはいえず、地方衙門の史典缺に比べて中央衙門のそれが圧倒的に少なかったと思われることを考えると、北京における長期の候缺を嫌って地方への定撥を求める吏員は広範に存在したであろう。彼らにとっては、三考目の缺にありつけないばいつまで経っても吏員暮らしが終わらず官位を得られないことになる。彼らのために京撥攢典缺を用意しておく必要があったのである。

さらに注目すべきは倉攢典缺が持つ意義である。第二章で述べたように、倉攢典だけは一年で役満となる規則があった。このことは、京撥吏にとっては早く役満を迎えら

れることを意味し、一方吏部にとつては滞留する京考候缺吏の人事を処理するために有益であつただろう。また遼東当局も例外措置を講じることで京撥吏の人事を遅滞させないための工夫を行っていた。つまり、倉攢典が京撥缺とされたのは京考吏の候缺問題を解消するためであつたと想定できよう。規則が設けられた洪武二十六年（一三九三）当初は不正防止の狙いがあつたと思われる倉攢典の任期の短さは、明中期以降に吏員の「缺少人多」問題が顕在化することにつれて、京撥吏に対する便宜を図り彼らの人事を進めるための手段という新たな意義を持つに至つたのである。

最後に、京考吏の候缺問題の背景として、先ほどの「缺少人多」に加え、京師における「缺主」の存在を指摘しておこう。董羽宸『捩焉小草』（国立公文書館蔵・内閣文庫）巻八「查革頂金疏」は崇禎十二年（一六三九）の上奏であるが、そこには北京の史典缺をめぐる状況が次のように述べられる。

吏部署部事左侍郎臣董羽宸謹奏、為直指吏弊、以佐銓政事。……如臣等前經查覆、所云缺主出而壳窩・租窩之弊生矣。臣等痛心此弊、久思釐革、使不設一法以革之、此輩私相授受、何所稽核。故欲革頂金、在除缺主、在汰冗役、而慎招人。……

在京衙門の史典缺には缺主がおり、これが缺の売買や出租

の元締めとなつていたことが指摘されている。下つて清代にも、缺主が史典缺を私的に所有し実際に就役する者と出租契約を交わしていたという<sup>24</sup>。明代にも同様の存在がいたと考へても不思議ではない。とすれば伝手もなく上京してきた多くの京考吏がこの缺主の存在に阻まれて北京での就役が叶わなかつた、というのも大いにあり得る話だろう。

以上、遼東における京撥吏をめぐる人事制度の運用を見てきた。遼東には京撥吏を参充するための缺が存在し、これらの京撥缺は、都司令典などのエリート向けの缺と、倉庫攢典の二種とに分類でき、特に倉攢典は滞留する京考吏の人事を進めるはたらきを期待されていたのである。

### おわりに

本論では、都司檔案を手がかりに嘉靖年間を中心に遼東における吏員人事制度の運用実態を見てきた。考察の結果を前稿で扱つた広東のそれと比較しつつまとめると次のようになる。

遼東においては、定撥の際に参充缺も同時に決定されるという参充缺指定定撥方式が採られていた。この方式では、一つの缺に複数の候缺吏がいる場合、初考・二考・京考を問わず定撥の年月日順に参充する原則であつた。ただし、

京考吏が倉・庫攢典に定撥されてきた場合にはその限りではなく、京考吏を先に参充した。この方式は、定撥時に参充缺を指定せず、また二考の者を優先して参充するという広東の行柱方式とは異なる。また、参充缺指定定撥方式が本来のあり方で、行柱方式は広東において便宜的に作り出された方式であったと思われる。このことは、順天府密雲県の例とともに、吏員人事制度運用における地方レベルでの自己裁量権の存在を示しているよう。

京撥吏が特定の缺に偏在していることから、遼東には京撥缺と呼ぶべき缺が用意されていたと思われる。京撥缺は二種類に分けられ、都司の令典などの缺と、倉・庫の攢典とがあった。前者は捐納額が多く、いわゆるエリートコースを歩み京考終了後により高い官位の獲得を目指す吏員のために設けられた缺で、後者は早く京考を消化したい吏員のため、また彼らの人事を進めたいという吏部・省鎮レベルの都合により設定された缺であったと思われる。

最後に今後の課題を述べておきたい。都司檔案の名冊には吏員の本籍地が記載される場合が多いが、他省を本籍とする者が相当数存在する。特に山東が多い。官員の出向や、軍糧供給ルートが存在したことに象徴される両地域の結びつき**②**の強さとも関係すると思われるが、今回は詳細な検討におよぶことはできなかった。こうした例のみならず、省

内・省間を移動する吏員は存外に多い。吏員の移動の問題については今後の課題としたい。

加えて課題とすべきは前代との関係である。明朝の吏員人事制度には官員のそれと共通する部分が多い。三年一考しかり、給由は吏員のみならず官員の人事手続きにおいても行われるという点しかり、である。また地方志を紐解くと、明代の県レベルの官には吏員出身者が少なからず見出せるし、吏員から出官した者の名を収録する地方志もある。

進士・挙貢（<sup>②⑤</sup> 挙人・貢生）・吏員を官への「三途」と称することがある明代にあつて、吏員は前二者とは重要度は比較にならないものの、確かに官に連なる位置にあつた。一方で元朝の制度との共通点も多く、<sup>②⑥</sup> 明朝が元朝の制度を継承していることは明らかである。胥吏出身者に官への道を大きく開いたという元朝の方針が、その後の明朝の吏員人事制度に影響を与えたという点も注目されるべきだろう。さらに最近では、遼金代における中央吏職について、先行する五代との関係をも視野に入れた研究も見られる。<sup>②⑦</sup> 胥吏身分が形成された唐宋代以降の制度の変遷を跡づけその意義を考察することをもう一つの課題として結びとする。

# 注

（1） 繆全吉『明代胥吏』（台北・嘉新水泥公司文化基金会、

一九六九。

- (2) 宮崎市定「清代の胥吏と幕友―特に雍正朝を中心として―」(原載一九五八、同『宮崎市定全集』一四、東京・岩波書店、一九九一、一七三～二〇五頁)。

- (3) 小野達哉「清末巴県の胥吏、譚敏政―2つの訴訟案卷から見た―」(『アジア史学論集』七、二〇一四、三五～五四頁)。

- (4) 拙稿「明末広東における吏員の人事・考課制度―顔俊彦『盟水齋存牘』を手がかりに―」(三木聰編『宋清代の政治と社会』東京・汲古書院、二〇一七、一五五～一八三頁)。

- (5) 遼寧省檔案館蔵の明代檔案については、甘利弘樹「明朝檔案を利用した研究の動向について―『中国明朝檔案総匯』刊行によせて―」(『満族史研究』一、二〇〇二、七三～九一頁) 参照。

- (6) 「遼」未収(88頁)「各衛呈送現役候缺吏典参充役満日期名冊」(隆慶六年)は、内容から複數衙門の名冊の殘闕の寄せ集めであり、また吏員と無関係のリストも含まれていると思われる。また、七六「中」未収「軍政掌印署都指揮僉事類送典史考試名冊」(嘉靖四十五年十二月)は、標点本に錯簡が存在することは明らかであるが、影印本に未収録であるため原檔案の形状などを手がかりに修正を施すことができない。

- (7) 巡按御史については小川尚「明代の巡按御史について」(原載一九七六、同『明代地方監察制度の研究』東京・汲古書院、一九九九、第一章「明代の巡按御史」一九～三五

頁) 参照。

- (8) 以上の遼東鎮の行政については荷見守義『明代遼東と朝鮮』(東京・汲古書院、二〇一四) 所収の各論考を参照。

- (9) 詳細は注(1) 前掲繆全吉著書「第三章 胥吏之人事」九八～一〇二頁。

- (10) 以下、本項で述べる吏員人事手続きについては、考課・考察名冊に関する部分を除き注(1) 前掲繆全吉著書「第三章 胥吏之人事」(九五～一三三頁) による。

- (11) 劉濤「明代吏員の参充及指参―以《盟水齋存牘》為考察中心」(『西南大学学报』(社会科学版) 三八三、二〇一二、一三七～一四四頁)、同「明代吏員の候参与指参」(『史学月刊』三七五、二〇一二、一二九～一三三頁)。

- (12) 「查得、布政司与都按二司参吏旧規、転考・農民・起復・截参・陸参・承差并生員充吏、各行頭挨次収参。行之既久。事体允便。将原撥定一応未参吏農、尽數查出、不論原撥定房眼、止係分別各行。俱以投批日期為始、開写卯簿。仍置立参吏簿一扇、備開参吏行頭。先参転考二名、次起復一名、次生員充吏一名、次充吏承差一名、次納銀農民二名、考選不納銀農民一名、次截参一名」(傍点は筆者。以下同じ)。

- (13) 都司檔案引用の際の表記は以下の通り。「」内の条文タイトルは標点本の、標点本未収の場合は影印本のもの。年月は標点本のものであるが、疑義のある場合は筆者の判断において改め註記する。引用原文中の□は一字欠、……は複數字が欠けていて字數不明のもの。□□□と三つ並べてあるのは人名と判断できる箇所。「」は字の一部が欠



損しているが字形・文脈から補ったもので、（ ）は文意や他の部分から推測したもの。《 》による註記は筆者。

- (14) 「改撥」とは参充缺を変更することで、特に二考に入る際に追加で銀兩を納入した吏員の参充缺の等級を上げることとを指す。

- (15) 李応挙の姓名の部分は原檔案では欠損しているが、次の孫世勲に関する記載の中に「改撥定遼左倉攢典、守候李応挙名缺」とあることによって知られる。

- (16) 「撫陞の効勞」とは、巡撫や巡按御史などの書辦（非正規胥吏の職務）を務めたという功績のことで、これを理由に賞与として史典缺を獲得したり昇格したりすることができた。しかしのちにこの効勞は、不正に史典缺を得る口実として用いられるようになった。注(11)前掲劉濤「明代吏員の候参与指参」および前稿、ならびに拙稿「明末広東における「書辦」について―盟水齋存牘」よりみる非正規胥吏―」（『史朋』五〇、二〇一八年三月刊行予定）参照。

- (17) 前述のように標点本・影印本には錯簡が多く、この二つの名冊は特に甚だしい。よって本来は筆者による考証の根拠や復元した名冊の全貌を提示すべきであるが、紙幅の都合で割愛する。

- (18) 七七・六四（二）にも見える張思聰は、考課名冊である七九（89.51）「遼東都指揮使司呈送考試典史年貌籍貫名冊」（隆慶元年七月）に名前が挙がっており、銀四十兩を納入し、初考は都司刑房典史、二考は同礼房典史を務めたとある。

同様に納銀額が四十兩におよぶことが確認できるのはほかに、都司架閣庫典史胡景時（七〇（89.51）「遼東都司各衛所候補典史送考文冊」、新納銀農民王景松（七五（89.58）「□□衛類送考試人員名冊」）の二名のみである。ただし、初考から二考に転ずる際などに銀兩を追加納付して上級の缺に参充されることがあった。これを「加納」という。五八（89.19）「定遼中衛管屯指揮僉事開造現役候缺吏典年甲籍貫備細脚色方冊」（嘉靖三十八年七月）の倉攢典・李珣の項には、「嘉靖三十八年六月十五日参充着役、頂補役滿攢典鄒尚文名缺」とある。この鄒尚文がもし先ほど見た都司吏房候缺令史の鄒尚文だとすれば、彼は【表4・②】にあるように二考が正しく、初考は攢典を務めたが加納して都司令史缺に改撥されたと考えられる。なお、都司檔案に見える倉攢典のうち捐納額が判明する例を見ると、十五兩もしくは二十兩である。

- (19) 注(1)前掲繆全吉著書「第三章 胥吏之人事」一〇六～一〇七頁。

- (20) 「照得、本県所属学駅倉場衙門一十四処、候缺京撥・転考・農民等吏、共七十餘人、輪序挨参。……乃條有京撥吏吳鵬、于万曆二十五年六月内、註撥石匣倉場候缺、本吏上首且有十人、輒敢称係按院効勞、具呈本院乞預参本倉攢典孫嘉猷名缺緣由。……」

- (21) 「今胡鳳陽撥到、因京考壅塞、方告外考。又遇本処該庫徐行守候、則京考守候無期。」

- (22) 「各執称、「見有広寧左倉京撥放外考吏劉槐与京納農民劉



延胤參缺、文卷可憑」、拠此。随即移文調取広寧通判衙門文卷到官。查得、卷内万曆六年十一月内、「蒙」（遼東都司）劉付、「為酌開納以裨……」（劉延胤納）一十五兩、告充広寧左衛倉……由」。蒙批、「遇缺収參。繳」。随蒙遼東都司劉行「本」衛、軫行該倉挨參。京撥吏劉槐、於万曆七年七月内、蒙遼東都司劉付、「為処置聽撥當該史典事。亦蒙本院案驗、備行本衛、即將放外考吏劉槐、軫行広寧左倉、查照挨次収參」。万曆九年十月内、該倉吏李尚松役滿、劉槐・劉延胤二吏互相爭參、該通判薛思敬查得、劉延胤係京納初考、劉槐係三考京撥放外考史典、已蒙闡撥。備由具呈戶部趙郎中処、蒙批、「劉槐已頂李尚松名缺、不為越次。劉延胤候另行參補。此繳」。先准京撥吏劉槐參充、劉延胤候有（缺）……。

(23) 繆全吉氏による、明代における中央・地方の吏額の試算によると、北京・南京各衙門の吏額は四千七百弱で、地方各衙門は五万ほどであったという。注（1）前掲繆全吉著書第一章第二節「經制額数」参照。

(24) 細井昌治「清初の胥吏——社会史的一考察——」（『社会経済史学』一四六、一九四四、一—二三頁）。

(25) 『明史』卷七一・選舉志三「進士為一途、舉貢等為一途、吏員等為一途、所謂三途並用也」。ただし、この「三途」が指すところには異説がある。谷光隆「明代銓政史序説」（『東洋史研究』二三二、一九六四、一九一—二〇七頁）、および井上進・酒井恵子訳注『明史選舉志1—明代の学校・科擧・任官制度』（東京：平凡社、二〇一三）の二〇—二一

一頁参照。

(26) 元朝の吏員人事制度については牧野修二『元代勾当官の体系的研究』（東京：大明堂、一九七九）参照。

(27) 高井康典行「士と吏の間——五代・遼金の中央吏職——」（編集委員会編『宋代史から考える』東京：汲古書院、二〇一六、一三五—一六六頁）。

〔附記〕 本論は日本学術振興会科学研究費補助金（課題番号16K03068）による研究成果の一部である。